調査研究報告書

姿勢の支持環境からみた都市型住居の空間特性

渡　邉　秀　俊（武庫川女子大学生活環境学部　講師）

1997

財団法人　姿勢研究所

はじめに

椅子や座椅子など、着座姿勢を支持する物的環境の寸法・形状はどうあるべきかという問題に対しては、これまでに人間工学の分野において数多くの研究蓄積がある。これらの研究では、正しい姿勢を保つための支持条件を、背筋の筋活動量、椎間板内圧、支持面の体圧分布、姿勢変化の度合などから説明するアプローチがとられている。しかし、これらの理論の多くは、ある一つの理想的な静的な着座姿勢が存在することと、一定の刺激に対しては人間は一定の反応をするという建築決定論を前提としたものである。また、研究の対象になる場面も特定の目的を伴った作業場面が多く、休息の場面はこれまであまり対象とされてこなかった。実際には一つの椅子においてもそこでとられる着座姿勢は場面によって様々な形態があり、これは時間と共に様々に変容する[1)]。また椅子以外の物が身体を支持するものとして利用されることも多い。

このように、人間は場面に応じて様々な物的環境に対して「身体を支持する物としての可能性」を能動的に発見している。例えば、河原で腰を下ろそうと思った場合、人間は周囲の数ある石の中から、座るのに手ごろな形の石を選んで座る。このとき、その石はこの人間（知覚者）にとって「座れそうだ」という知覚を引き起こす資質を備えていたと考えることができる。このように知覚者によって能動的に発見される環境が備えている資質のことを、知覚心理学者のギブソン（Gibson,J.J.,1904～79）はアフォーダンス（affordance）と呼んだ。彼が知覚と環境との相互依存的な関係の説明として造ったこの言葉は、アフォード（afford：提供する、可能にする）という英語がもとになっている。アフォーダンスという言葉は辞書にはなく、彼の造語である。この概念に基づいて、住宅の居室から都市空間に至るまでの多様な環境を観察すると、「身体を支持する」という行動の可能性を人間が実に様々な物的環境に発見している様を見てとることができる。

本研究は、このアフォーダンスという概念に着想を得て、これまで人間工学や建築計画学では扱われてこなかった、住居内での休息姿勢とそれを可能にしている物的環境との相互関係について、生態学的心理学の側面から考察するものである。これにより、刺激に対して一定の反応をする受動的な人間モデルではなく、環境に対して自ら意味を付与し解釈する能動的人間モデルを前提とした新たな姿勢研究の可能性を考えたい。

---

1) 渡辺秀俊，安藤正雄，高橋鷹志：着座場面における姿勢の経時的変化－人間-環境系における着座姿勢の働態に関する研究（第１報），日本建築学会計画系論文報告集，第474号，pp107-114，1995